### 5. シェーグレン症候群における耳下腺造影と唾液腺シンチグラフィ

宮崎知保子　久保　公三　手戸　一郎
（市立札幌病院・中放）
大本　晃裕　河野　通史　（同・二内）
末永　通　（同・耳鼻）

厚生省基準によるシェーグレン症候群および疑い例49症例の右耳下腺造影と耳下腺シンチグラム所見の比較検討を行った．

耳下腺造影はLubin-Holt分類に従いII型以上を，唾液腺シンチグラフィは得られたtime activity curveからそのpatternをI–IV型に分類し，II型以上を異常とした．耳下腺造影を基準とすると，唾液腺シンチグラフィのsensitivity 85.2%, specificity 40.9%であったが，Lubin-Holt分類0–I型22例中13例はシンチグラム上異常所見を呈した．またL-H分類II型15例中3例はシンチグラムでは高度の異常を示した．唾液腺シンチグラフィは耳下腺造影による形態学的変化よりも早期にその機能変化をとらえると思われる．

### 6. 脳腫瘍例における $^{201}$TlCl-SPECT

戸村　則昭　小林　満　真山　一郎
加藤　敏郎　（秋田大・放）
佐々木一文　田村　清彦　（同・中放）
伏見　進　峯浦　一喜　古和田正悦
（同・脳外）

17例の種々の脳腫瘍例において，$^{201}$TlCl-SPECTを施行し，その有用性について検討した．early imageとdelayed imageとにおいて，腫瘍部と対称部とのcount比をTl ratioとした．Tl ratioは，3例を除いてdelayed imageで低下しており，imageのみではdelayed imageの必要性はないと考えられた．meningiomaでは，いずれもTl ratioは高かったが，それ以外での良性腫瘍では悪性腫瘍に比べTl ratioは低かった．3例では，放射線・化学療法の前後に施行したが，delayed imageにおけるTl ratioは，治療前に比べ治療後に，いずれも低下していた．

### 7. 肺腫瘍における $^{201}$Tl-SPECTの臨床的検討

星　俊子　佐藤　明弘　菊池　良郎
（竹田綜合病院・放）

対象は，肺腫瘍疑で$^{201}$Tlシンチを撮影して，病理学的あるいは臨床的に診断のついた48例（悪性36例，良性12例）．$^{201}$Tl chloride 4 mCi (148 MBq)を静注して，10分後と4時間後に全身planar像と胸部SPECTを撮像し，水平断，前額断，矢状断の3方向の画像を作成した．腫瘤部に，early image, delayed imageの両方で，明らかに集積亢進を認めるものを悪性と判断した．

肺野病変の良悪性については，有病正診率94%，無病正診率92%，正診率94%と大変良好な結果であった．最小で1.5×1.7 cmの腫瘤が描出されている．リンパ節転移については，有病正診率31%，無病正診率90%，正診率57%と低かった．

以上の結果より，肺野病巣の良悪性の判断には，$^{201}$Tlシンチは有用と考える．

### 8. $^{99m}$Tc-MAA肺血流シンチグラフィでR→Lシャントを示した肝硬変の二例

塚本江利子　伊藤　和夫　中駄　邦博
永尾　一彦　鐘ヶ江香久子　藤森　研司
古舘　正従　（北大・核）
鈴木　潤一　（同・一内）

$^{99m}$Tc-MAA肺血流シンチグラフィにてR→Lシャントを示した低酸素血症を伴う肝硬変二例を経験した．二例とも心臓には，R→Lシャントを伴う異常はみられず，低酸素血症の原因となるような肺の異常もみられなかった．肝硬変においては，肺毛細管の拡張がみられることがあり，これによる肺内シャントが知られている．われわれの経験した二例も，この肺内シャントにより低酸素血症がおこったものと考えられた．肝硬変の肺血流シンチグラフィにおいては，このような肺内シャントの存在を考慮にいれ，肺外臓器の描画にも注意する必要があると思われた．

Presented by Medical*Online